

周作人の「久米仙人」翻訳に関する一考察：〈趣味〉、〈人情〉と〈重訳〉をめぐって

斐, 亮
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/24640>

出版情報 : Comparatio. 15, pp.65-80, 2011-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



周作人の「久米仙人」翻訳に関する一考察 ―〈趣味〉、〈人情〉と〈重訳〉をめぐる―

裴 亮

はじめに

周作人は、兄の魯迅と共に、近代中国における最も有名な文筆家として、文壇にデビューしてから高い評価を得ていた。彼は翻訳から文学の道を歩み(注1)、しかも翻訳活動を思想革命と言語革命に不可欠な一環として積極的に実践した。近年、十巻の『苦雨齋訳叢』(注2)(止庵校訂、中国对外翻訳出版公司、一九九九～二〇〇五年)、『周作人散文全集』(鐘叔河編、広西師範大学出版社、二〇〇九年)の刊行により、周作人の文章が容易に読めるようになり、周作人の翻訳に関する研究も、高い関心が寄せられてきた。既存の研究は、彼の翻訳思想並びに創作と外国文学との受容関係などに力点の置かれた論考が主軸である(注3)。一連の日本文学の翻訳活動が、彼の文筆家としての成長に巨大な影響を与えたことは注目される。しかし、周作人が多数の作家の作品を翻訳した際に、それぞれの作品に対する翻訳の方針や動機等に関しては、未だ充分に研究されていない。例えば、周作人と武者小路実篤が「新しき村」の運動を通じて交流していたことは、周作人研究者によく取り上げられている。(注4)だが、多くのものは、二人の交友関係や、白樺派との受容に偏る傾向がある。また、翻

訳という視点からの文学史的な記述があるばかりで(注5)、翻訳の内面まで踏み込んだ論考は、管見の限り見当たらない。

一九二〇年代における周作人の翻訳の活躍を象徴する出来事としては、兄の魯迅と共訳した『現代日本小説集』(一九二三年)が挙げられる。周作人は武者小路実篤の短篇「久米仙人」を同名で中国語に訳し、武者小路のもう一つの「第二の母」の訳文と共に、『現代日本小説集』に収めた。興味深いことであるが、「久米仙人」が周作人に翻訳される前に、韞玉(注6)という作家に訳され、当時中国における思想や文学の最前線である『東方雜誌』に掲載されていた。にもかかわらず、周作人は韞玉の訳を意識しながら、自らも「久米仙人」を訳し、『晨报副刊』に発表した後『現代日本小説集』にも収録した。既存の前訳があり、しかも雑誌に掲載後に翻訳集に再び収められたことから見れば、「久米仙人」は周作人にとって特別な意味を持つ作品であることがわかる。

本稿では、周作人が武者小路実篤の「久米仙人」を翻訳したことに注目し、その経緯と翻訳動機を考察する。また、周作人が翻訳の時に参照した韞玉訳の「久米仙人」との比較を行い、周作人がこの作品を翻訳する意図と重訳に対する考えが、彼の翻訳実践にどのように関わったのかを明らかにしたい。

一 武者小路作品の翻訳者としての周作人

周作人は一九二二年四月二十七日に「久米仙人」の翻訳を完成して間もなく、五月三日に『晨报副刊』に発表した。翻訳の経緯について、「訳者付記」の中で次のように語っている。

這篇小説、当初在日本的雜誌上發表的時候、曾經有人譯過、登在東方雜誌上。現在據「燃焼的林」(一九二二年)(注7)裏著者編定本譯出。

(拙訳 この小説は、日本の雜誌に掲載された当時、かつてある人に訳され、『東方雜誌』に掲載された。いま、『燃焼的林』(一九二二年)にある著者の定本によつて訳した。)

一九二三年六月出版の『現代日本小説集』に収めた際に、周作人は「付録」の中でも、「久米仙人 (Kimesennin) 見燃焼的林 (一九二二) 中」という説明を付けていた。以上の二つの説明により、周作人は一九二二年に出版された武者小路実篤の短篇集『燃焼的林』を底本にして、それに収録された短篇作品群から「久米仙人」を選び訳したということが分かる。ここでは、『燃焼的林』の実体、また周作人の武者小路実篤作品の翻訳状況を整理しておきたい。

初刊本『燃焼的林』は大正十一年三月十五日、新しき村出版部である曠野社により出版され、四六判、二一四頁、岸田劉生装幀である。中には、「友の話」、「久米仙人」、「一日の素盞鳴尊」、「ユダの弁解」、「ヨハネ、ユダの弁解を聞いて」、「ある夫婦」、「ある日の手紙」、「小品六つ」、「張男の最後の日」という九篇の短編小説が収められている。単行本『燃焼的林』に収録された「久米仙人」の最後には「二〇・一一・一七」という数字があり、周作人はそれを作成時期として「一九二〇年十一月十七日原作」と訳している。実は、「久米仙人」は『燃焼的林』に収録される前に、大正十年(一九二一年)一月一日に雑誌『太陽』の第二十七巻第一号に掲載されたことがある。また、ほかの作品も同じように公開発表したものであり、各自の初出は下記の通りである。

作品名

初出(巻・号・年)

- ・「小品六つ」 (二つ小品『白樺』11・1・大正9) (小品四つ『白樺』11・2・大正9)
- ・「友の話」 『解放』3・1・大正10
- ・「久米仙人」 『太陽』27・1・大正10
- ・「一日の素盞鳴尊」 『改造』3・1・大正10
- ・「ユダの弁解」 『生長する星の群』1・1・大正10
- ・「ヨハネ、ユダの辯解を聞いて」 (同「ユダの弁解」)
- ・「ある夫婦」 『太陽』27・11・大正10
- ・「ある日の手紙」 『新小説』26・9・大正10
- ・「張男の最後の日」 『生長する星の群』2・2・大正11

『燃焼的林』に収められた作品の中で、「久米仙人」のほか、「ある夫婦」も周作人によつて翻訳された。実は、「ある夫婦」も『燃焼的林』に収録される前に、大正十年の『太陽』(第二十七巻第一号)に掲載されたことがある。訳作「某夫婦」は、『小説月報』(一九二三年、第十四卷十一期)で一度刊行され、後に「一日裏の休」と共に周作人編集の日本小説集『兩条血痕及其他』(上海開明書店、一九二七年)に収録された。訳文の最後には、「久米仙人」の訳と同様に、周作人は訳者の付記を書き加えている。ここで、訳者付記の冒頭の部分を抜粋してみる。

「某夫婦」の付記(一九二三年七月十七日)

這一篇小説見去年出版的短篇集『燃焼的樹林』中、今收在『武者小路全集』卷五第二部。武者小路君的著作之譯成中国語者、有毛李二君合譯的「人間的生活」、魯迅君譯的「一個青

「年の夢」、我所譯的「久米仙人」和「第二之母」。在『現代日本小説集』（世界叢書之一，未出版）中，寄凡君譯的童話劇『開花翁』和『地藏与鬼』等。

以上の周作人が付け加えた説明から見れば、彼は自分の翻訳以外に、当時中国の全土における武者小路実篤の作品の翻訳状況を把握して詳しい紹介を行っている。付記の中に言及している「人間的生活」は、毛咏棠、李宗武により訳され、一九二二年一月に上海中華書局により出版されたものであり、魯迅の「一個青年的夢」（一九二二年七月）より半年早いため、中国における最初の武者小路実篤の翻訳単行本と考えられる。実際に、毛咏棠、李宗武が「人間的生活」を翻訳した際に、周作人は彼らの訳文を校閲したり、彼らに自分の翻訳経験を教えたりし、序文まで書いていたりした（注8）。また、一九三四年九月、彼は日本の『改造』に寄稿した「日本文学を語る」という文章で、武者小路実篤作品の翻訳の心得を次のように述べている。

武者小路実篤のものなど、一見実に簡単な文章に見えるが、さて譯すとなると難かしい。あの短い語句を漢文にすると、どうしても長くなつて困る。だがそれにも拘はらず、実篤の作品は可成り多く譯されてゐる。文芸の方と、思想の方と両方あるから、数としては現代作家の中随一かもしれない。

従つて、周作人が自ら武者小路実篤の翻訳を世に送るために心を砕き精力を注いで、実績を積み重ねたと同時に、他人が武者小路実篤の翻訳を出すことを援助し、当時の文壇における武者小路実篤の翻訳状況にも常に関心を寄せた。ここでは、周作人が翻訳した武者小路実篤の作品をまとめてみる。

表一 周作人による武者小路実篤作品の翻訳一覧表（注9）

作品名	参考底本	入手時期	訳文初出	翻訳完成時期	発表時期
一日裏の一休	小さき世界（1916）	1918. 4	『小説月報』 （13巻4号）	1922. 1. 12	1922. 4. 10
久米仙人	燃ゆる林（1922）	1922. 3	『晨报副刊』	1922. 4. 27	1922. 5. 3
第二的母亲	彼が三十歳の時 （1915） 小さき世界（1916） 第二の母（1919）	1919. 7 1918. 4 1919. 11	『現代日本 小説集』 単行本初出	1922. 4. 30 以前	1923. 6
某夫婦	燃ゆる林（1922）	1922. 3	『小説月報』 （14巻11号）	1923. 7. 17	1923. 11. 5
嬰兒屠殺中的一件小事	武者小路実篤全集 第一巻（1923）	1923. 6	『語絲』 （77号）	1926. 4. 12	1926. 5. 3

二 着目点——「久米仙人」に現れる〈趣味〉と〈人情〉

周作人が一九二〇年度の日記の最後に整理した「武者小路実篤著作目録」によると、彼が一九二〇年までに集めた武者小路実篤の著作は、合わせて二十八冊である。一九二〇年以降、『周作人日記』に記された「読書購書目録」においても、武者小路実篤の著作がよく見られ、一九三四年までには全部で五十三冊（注10）にも及んだ。中には、武者小路実篤が自ら周作人に寄贈したものもあり、『燃ゆる林』はその中の一冊であった。五十数冊の作品集を入手していたが、その中から訳出したのは、僅か五篇であった。その選択基準は厳しいと言えよう。しかし、一九二二年三月に『燃ゆる林』を入手した周作人は、四月二十七日に「久米仙人」の訳を速やかに完成した。それと対照的に、同じく『燃ゆる林』に収録された「ある夫婦」の翻訳は一年後の一九二三年の七月に至ってはじめて行われた。では、「久米仙人」のどんな要素が周作人の趣味を引いたのであろうか。また、「久米仙人」の選択、そして底本の入手から翻訳の完成までがわずか一ヶ月間で終わったその速さには、一体どんな考えがあったのか。その動機を検討したい。

（一）〈趣味〉——内容と形式、訳者と作品

日本古典文学に深い造詣を持つ周作人は、「久米仙人」を翻訳して中国の新聞『晨报副刊』に掲載した際、訳文の結末に自ら次のような注釈を付け加えている。

日本伝説、久米仙人 (Kume - senjin) 本は大和添上の人、入深山修仙術、能飛行空中。一日見河邊洗衣女人露其脛、忽

起染心、遂墜地不復能飛。（拙訳：日本の伝説。久米仙人は元々大和国添上出身の人で、深山に入って仙術を修行し、空を飛べる。ある日川辺で服を洗っている女が露出した脛を見ると、忽然邪念を起し、遂に墜落して二度と飛べなくなった。）

この久米仙人の逸話は周作人が語るように伝承が古く、本来の話は大和の久米寺の縁起として伝わったのである。この物語は、『和州久米寺流記』の「久米仙人経行事」の条、『今昔物語集』卷十一第二十四話、また『扶桑略紀』卷二十三延喜元年の条、『元亨釈書』卷十八などに見られるが、広く読まれる『徒然草』の第八段にも書かれた久米仙人の話がよく知られている。『徒然草』では、次のような一節が書かれている。（傍線は引用者による、以下同様）

世の人の心をまどはす事、色欲にはしかず。人の心は愚かなるものかな。

匂ひなどは仮のものなるに、しばらく衣裘に薫物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心どきめきするものなり。

久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て、通を失ひけんは、誠に、手足・はだへなどのきよらに、肥え膏づきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし。（注11）

一九二五年四月、周作人は『徒然草』の中から十四段を選び訳し、『徒然草』抄」という題で雑誌『語絲』二十二期に発表した。原作の順序に従わず、「一 憂患」、「二 長生」のように、小見出しをつけている。その中に、「四 女色」はやはり久米仙人に関するくだりに当たる。訳文の後ろには注釈として、「案」という形で訳者のコメントも付いている。例えば、久米仙人に触れた訳文と注釈を左記のように抽出してみる。

惑乱世人之心者莫過於色欲 人心真是愚物。色香原是假的，但衣服如經過薰香，雖明知其故，而一聞妙香，必會心動。相傳久米仙人見浣女脛白，失其神通，實在女人的手足肌膚艷美肥澤，與別的顏色不同，這也是至有道理的話。

(案『元亨釈書』卷十八云、「久米仙人者和州上郡人，入深山学仙方，食松葉，服薜荔。一日騰空飛過古里，会婦人以足踏浣衣，其脛甚白，忽生染心，即時墜落。」)

『徒然草』に關する一連の翻譯は一九二五年に至つてはじめて發表されたが、周作人が文末に書いた説明によると、十四段のうちの九段は實は一九二四年の旧訳であつた。また、一九二四年一月二十二日の周作人日記には、「古本『徒然草』一冊を買つた(注12)」という『徒然草』の購入に關する記述が見出される。『徒然草』を選訳した際に、再び久米仙人と關連する部分に目を配つたことは、周作人が久米仙人の昔話に非常に興味をもつていたことを改めて裏付けるものであらう。

さらに、一九三五年十二月十一日、周作人は『北平晨報』に寄稿した「老年」という文章において、色欲という主題を語る際に、前述の『徒然草』抄で選訳した久米仙人の一節「四 女色」を再び引用する上で、次のように興味深く述べている。

本来訶欲之文出於好色，勸戒故事近於淫書，亦是常事。但那樣明說色雖可憎而實可愛，殊有趣味(後略)

(拙訳 本来色欲を叱る文章は好色によるものであり、勸戒の物語は淫書に近いものであることは、常にあることである。だが、色香をあのように説くとすれば、憎々しいが実に可愛らしく、殊に興味がある(後略))

つまり周作人は、人間の色欲を率直に表現しているこの一節に現れる「趣味」に魅了されたという。こうした久米仙人の逸話に關する再三の言及の中で、周作人はそれに一体どのような考えを託したのであらうか。實は、『徒然草』抄の「引言」には、次のような手掛かりとなる解釈が書いてある。

『徒然草』最大の価値可以說是在於它的趣味性，卷中雖有理論的議論，但決不是乾燥冷酷的，如道学家的常態，根底裏含有一種溫潤的情緒，隨處想用了趣味去觀察社會萬物，所以即在教訓的文字上也富於詩的分子(中略) 以下所譯十四節是我覺得最有趣味的文章，形式雖旧，思想却多是現代的。

(拙訳 『徒然草』の最大の価値はその趣味性にあると言える。中には理論の議論があると雖も、決して乾燥かつ冷酷な、道学者の常態の如きものではなく、その根底に一種の溫和な情緒が含まれている。随所で趣味を以て社會萬物を觀察しようとしている。故に、たとえ教訓の言葉であっても詩の雰圍氣が溢れている。(中略) 以下に訳された十四節は、私が思うには最も趣味性をもつ文章であり、形式は古いとはいへ、思想の多くは現代のものである。)

注目すべきなのは、周作人が「趣味性」(注13)という重要な言葉を用い、『徒然草』の最大の価値は趣味性であると指摘したことである。彼は『徒然草』の中にある久米仙人の話と關つた一節を、「最有趣味」の段落の一つと評価したことから、『徒然草』を翻譯した考えの中に、間接的ながら周作人の武者小路の「久米仙人」に対する一種の認識をみることができたらう。翻譯の評論に止まらず、彼は「笠翁与隨園」(一九三五年)において、「趣味」と

いう理念の内実について更に次のように闡明している。

我很看重趣味，以為這是美也是善，而沒趣味乃是一件大壞事。這所謂趣味里包含着好些東西，如雅，拙，朴，澀，重厚，

清朗，通達，中庸，有別致等，反者都是沒趣味。（中略）平常沒有人对生活不取有一種特殊的態度，或淡泊不經意，或瑣瑣多有取舍，雖其趨向不同，却各自成為一種趣味。（注14）

（訳（注15） 私は非常に趣味を重視し、これこそ美であり善でもある、そして没趣味はまことに大きな悪いことと思っている。このいわゆる趣味の中には雅、拙、樸、澀、重厚、清朗、通達、中庸、別致あること等、いろんなものが含まれ、これに反するものはすべて没趣味である。（中略）普通、誰しも生活に対して一種特別な態度を取らぬはなく、淡泊にしていかに介せざるがごとくであるとか、一一何でもないことにも取舍するところがあるとか、その趨向は同じくなくとも、おのおの自ら一種の趣味を成してゐる。）

要するに、日本文化の薰陶に浸潤していた周作人は、「趣味性」を重視し、また情趣の豊富さを追求していた。彼が求めていた「趣味」とは、文学の美を追求する理念と、人生に向き合う態度の合体であり、換言すれば人と作品の気質の統一である。従って、「趣味」という言葉自体は、『徒然草』などの日本古典文学に対する周作人の評価の核心をなす概念の一つであるだけでなく、「趣味性」の有無という出発点もまた、訳者としての周作人の興味と関心を反映していると考えられる。以上のような見方を以て、「久米仙人」を顧みてみると、どんな結論が見出されるだろうか。『現代日本小説集』の「付録」の中には、「久米仙人」に関する説明は単に一行

の底本についての説明があるばかりで、作品に対して、直接自己の評価を述べていないが、武者小路実篤の作風について語るものが一箇所ある。ここに、引用する。

他的著作單純真率，不施技工，自具清新之氣，極有感人的力量。（拙訳 彼の著作は純粹率直であり、技巧が施されず、清新の氣があり、人を感動させる力を特に有する。）

実は、『現代日本小説集』の中に収録された武者小路の作品は、「久米仙人」と「第二の母」しかないため、ここにいる風格の「單純真率」、手法の「不施技工」、また総合的に「具清新之氣、有感人的力量」といった点は、間接的ながら「久米仙人」に関する評価と見做すこともできると考える。これらの評価を、前文で引用した彼の「趣味」の内包と照合してみれば、まさに「單純真率」が「雅」に、「不施技工」が「拙」に、「具清新之氣」が「清朗」に、「有感人的力量」が「重厚」に当たると言えるだろう。

風格と別に、『徒然草』の形式に関して、周作人が特に賞賛した旧い形式に現代思想が浸み込まれているという特徴も、『徒然草』の形式上の「趣味性」だと言えよう。「古い皮袋に新しい酒を盛る」というような形式上の現代性と趣味性にふれた点においては、魯迅の芥川龍之介に関する紹介文―「昔の物語は彼（芥川龍之介―裴注）によって書き改められると、新たな生命が注ぎこまれ、現代人と関係が生じてくる」（注16）―を連想させる。

周作人の翻訳観が魯迅と異なる点を探る論考は既にかんりの数に上る。しかし、彼の早期の翻訳活動はほぼ魯迅とともに進んでいた点から、魯迅の影響を受けたことも想像できる。魯迅と周作人の日記書簡から、『日本現代小説集』の編集をめぐる交流を整

理してみれば、小川利康氏が指摘するように、魯迅は作家や作品の採録に関して周作人と意見を交わし、助言の役割を果たしたのである（注17）。実は、『現代日本小説集』に収録された魯迅が翻訳した芥川龍之介の二篇も、「久米仙人」と共通する傾向が窺われる。内道場供奉禪智和尚の長い鼻の話を題材にする「鼻」は日本の古い伝説であり、また「羅生門」の初出は平安時代の『今昔物語集』に拠るのである。ここに、魯迅が書いた「附録（作者に関する説明）芥川龍之介」より引用してみる。

他又多用旧材料，有時近於故事的翻譯。但他的復述古事並不專是好奇，還有他的更深的根據，他想從含在這些材料里的古人的生活當中，尋出與自己的心情能夠貼切的觸着的或物，因此那些古代的故事經他改作之後，都住進新的生命去，便與現代人生出干系來了。

（訳（注18））彼はまた旧い材料を多用し、時には物語の翻訳に近くなっている。だが、昔のことをくり返すのは単なる好奇心だけではなく、より深い根拠に基づいてのことである。彼はその材料に含まれている昔の人々の生活から、自分の心情にぴたりし、それに触れ得る何ものかを見出そうとする。だから、昔の物語は彼によって書き改められると、新たな生命が注ぎこまれ、現代人と関係が生じてくる。）

魯迅の芥川龍之介説明文は、冒頭の生年学歴及び末尾の作品解説を除けば、藤井省三氏も指摘するように、一九一九年一月に雑誌『新潮』掲載の田中純「芥川龍之介氏を論ず」をモザイク的に切り貼りしたものである。また、秋吉收氏の指摘によれば、一九二一年五月十一日、『晨报副刊』掲載の「鼻」訳者付記」において、

魯迅が同じく田中純の評論を使用しても、後の一九二三年『現代小説集』収録時とは、その論調は同一ではない。どちらも芥川龍之介の作品が「旧い材料を多用し、ときには物語の翻訳に近い」事実を述べても、一九二一年の時点では「芥川氏に不満なのは」と、最初から否定的であるのに対して、一九二三年に至ると、その「不満」は完全に消失している。また、「鼻」の解説に関して、一九二一年には「作者はそれに新しい装いを施してみせたにすぎない」とかなり辛辣に批判にしていたのに、一九二三年の段階ではその部分を削除している（注18）。このような変化は、魯迅における芥川龍之介の受容問題と深く関わっているが、これについて本稿は展開しない。ここで強調したいのは、一九二三年に至って、魯迅が「付録」に書いた「新たな生命が注ぎこまれ、現代人と関係が生じてくる」という紹介文は、田中純の評論の引用でありながら、その時期の魯迅の意図が窺われる。『現代日本小説集』の作品の採録において、周作人のいう「旧い形式に現代の思想」という形式上の趣味性への推賞が、魯迅の選択に現れた趣旨と軌を一にする。

以上は、翻訳対象の「趣味性」という視点から見てきたが、翻訳の主体の「趣味」ということについて、周作人はどう認識しているのだろう。一般に、魯迅は翻訳する作品の選択について、当時の中国社会にとつての必要性という基準を常に用意していた、という指摘がある。周作人の場合についてみると、彼は同じ時期の一九九二年に書いた「關於『愛の実現』的翻訳」（『晨报副刊』一九二二年八月二十八日）の中に次のように述べている。

我的選択，差不多是無所依據的，只以自己的趣味為標準，或者覺得他可以代表著者的思想和藝術，也就收入。但是在這

上邊又有一個限制，便是篇幅的長短。我平日翻譯，就有這樣的癖氣，大抵多取長短適中，五六千字的作品，將他寫出來。

（拙訳）私が選んだものは、殆ど依拠する所がなく、ただ自分の趣味を基準にし、或いはそれが著者の思想や芸術を代表することができると考えれば、それも収録する。しかし、その上でまた一つの制限があり、それは文章の長さである。

私は普段翻訳する時には、こんな癖がある。それはたいいてい紙幅がちょうどよい、五六千字ほどの作品を選択して訳出するのである。）

この説明は、一九二〇年代の周作人の選択基準を理解するには非常に重要な手掛かりである。要するに、第一、まず自分の趣味にあうかどうか。第二、作者の思想や芸術を代表できるかどうか。第三、文章の長さは適切であるかどうか、といった三つの要素が示されている。ここにいう翻訳の「趣味」に関しては、彼が一九五〇年に書いた「談翻訳」において、次のように解釈している。

所謂趣味的、或者這裏也略須解說。這並不說是什麼有趣的書，實在只是說譯者的工作純粹從他的趣味上出發，即是對於所譯的書譯者衷心的愛好，深切了解作者的思想，單是自己說了覺得可惜，必須把它寫出來給人看才為滿意，此是一種愛情的工作。（注20）

（拙訳）所謂趣味的なことについては、ここで簡単に解説する必要があるかもしれない。これは決して面白い本であると言っているのではなく、実に翻訳者の仕事がただ純粹に彼の趣味から発するということである。即ち翻訳の対象に対して訳者が衷心より愛好し、作者の思想を深く理解し、ただ自

分一人だけが読むのは惜しいと感じ、それを訳出して人に読ませなければ満足できないので、一種の愛情の仕事である。）この二つの選択基準に関する言及を統合してみれば、作品の社会性を重視する魯迅の考えと異なつて、周作人は作品自体の趣味性と訳者の主観的な趣味の統合を主張していると推察できる。

（二）〈人情〉——人道主義の受容の文脈において

周作人は武者小路実篤の「新しき村」運動、またその人との付き合いについて様々な文章を書いたが（注21）、彼は武者小路実篤作品の翻訳についての発言は少なく、前述の「改造」への寄稿のほか、日本の雑誌『文芸』（二巻九号、改造社）に掲載された井上紅梅との対談にも見られる。一九三四年七月、翌年に開設する予定の北京大学日本文学講座用の資料を収集するために、周作人は日本を訪ねた。その時、中国における日本文学翻訳状況について、周作人を取材にきた井上紅梅と次のような問答が行われた。

【問】一般にはどう云ふものが翻訳されてをりますか？

【答】初めは武者小路氏のもの盛んに歓迎されました。之れは五四運動頃にトルストイの人道主義に共鳴したものが多かったからです。文学論もトルストイの文学論を珍重してゐました。

この会談によれば、周作人は中国において最もよく翻訳される作家が、武者小路実篤であると判断し、またその原因は、当時武者小路実篤の翻訳事業がトルストイの人道主義の紹介の一環として見做されていたことにあると説明している。ここでは、周作人が提示している「武者小路実篤——翻訳——人道主義」の考え道筋に従

い、翻訳の視点から、「久米仙人」と周作人が提唱した「ヒューマニズム」との接点について検討したい。

一九一八年十二月、周作人は「人的文学」という文章を『新青年』第五卷第六号に発表した。この作品は五四運動のヒューマニズムの誕生に大きな影響を与えた。彼の初期の文学思想の中核となるこの文章の冒頭で、彼は「現在、我々が提唱すべき新文学とは、一言でいえば、『人的文学』である」というように新文学を定義した。続いて、「人道主義」の歴史、「人」の概念などの面から、人道主義について、次のように系統的に論述している。

我説的人道主義、是從個人做起。要講人道、愛人類、便須先使自己有人的資格、占用人的位置。(中略)用這人道主義為本、對於人生諸問題、加以記錄研究的文字、便謂之人的文学。

(訳(注22)) 私のいふ人道主義は、個人から出発するのである。人道を説き、人類を愛するには、先づ自分に人の資格を有せしめ、人の位置を占めさせなければならぬ。(中略)この人道主義をもつて本となし、人生の諸問題に対して、記録研究を加へた文字、これを人の文学といふのである。)

周知のように、武者小路実篤は白樺派のリーダーとして、トルストイの理想主義的人道主義の影響を受け、それを実体化するものとして「新しき村」を一九一八年に宮崎県に建設した。周作人が「人的文学」を書いた一九一八年は、ちょうど彼が武者小路実篤の新しき村運動に関心を持っていた時期であった。例えば、一九一八年十月二十五日の日記の中では、「上午往日本郵局寄新テシキ村一円二十銭。(中略)閱『新テシキ村ノ生活』第一部了」と記述している。十一月九日、日本から寄贈した「新しき村の説明

と精神及会則」が届いたという(注23)。その後、周作人は当時中国の文芸思想界で最も読まれている雑誌『新青年』や『新潮』(北京大学)等に武者小路実篤の新しき村運動について文章を書き、積極的に紹介した。例えば、「新村の理想と実際」(『晨报』副刊、一九二〇年六月二十三)という文章で、周作人は「新村の理想、簡単に一言でいえば、人的生活である」と総括的に述べている。それは、やはり「人的文学」の精神と一貫している。従来、あまり注目されていないが、実は周作人の「人的文学」の提唱には、彼の翻訳観にも繋がる。例えば、彼が「人的文学」の結尾において、人道主義の理論を唱えた上に、如何にこの理念を実現していくかについて、彼は次のような処方を出している。

我們偶有創作、自然偏於見聞較確的中國一方面、其餘大多數都還須介紹譯述外國的著作、擴大說者的精神、眼裏看見了世界的人類、養成人的道德、實現人的生活。

(訳(注24)) 勿論われわれが偶々創作する場合には、おのづと見聞の多少とも確かな中国の一方面に偏することであるが、その余の大多数は更に外国の著作を紹介訳述し、読者の精神を拡大し、眼中に世界の人類を見出し、人の道德を養ひ、人の生活を実現するやうにしなければならぬ。

周作人はこの「人的文学」の実現を外国著書の翻訳に大いなる希望を託していた。その考えを實踐に徹底したのは、訳作集『点滴』(一九二〇年、北京大学出版)からの一連の翻訳活動である。傳斯年の要求に応じ、周作人は『点滴』の「序文」で、『点滴』に収録された翻訳における二つの特色を、「一、直訳の文体。二、人道主義の精神」と言明している。

以上、周作人が武者小路実篤の「久米仙人」を翻訳するに当たつての文脈や背景について整理してきたが、続いて「久米仙人」文章自体をその文脈に照らし合わせて分析していく。

伝承上の「久米仙人」とは、天平年間に久米寺を建てた伝説の仙人である。『今昔物語集』(注25)によれば、大和国吉野郡の竜門寺で仙術を修業し、飛行の術を得て空を飛ぶに至った。吉野川の上空を飛んでいた時、川辺で洗濯をしていた女の白い脛を見て神通力を失い、墜落してしまう。その後、この女を妻にし仏の人間として暮らしていたが、高市遷都の際に、再修業して仙術を回復し、その神通力で木材を運んだ。久米仙人は、これを聞いた当時の天皇に土地を与えられ、久米寺を開いたと伝わってきた。しかし、武者小路実篤の「久米仙人」は、改作のような短編小説である。まずは、武者小路実篤の「久米仙人」の梗概を述べておく。

武者小路実篤の「久米仙人」は、その「久米仙人」の墜落の原因や、物語の結末について、従来の話と全く異なった説を提示している本を発見したというところから始まる。久米仙人は人間の無常を悟り、仙人になることを決心した。彼は自分の体を浮かせ、空を飛ぶ為に、人間界のあらゆるものへの未練や執着を断ち切り、あらゆる欲望と禁物から離れた。それで、順調に天上界に入つて、仙人になった。しかし、ある時彼が雲に乗つて、上空から地面の自然や村々や田園を眺め渡すと、彼はその風景の美しさと人間の可愛さに魅了された。下界の人間のことに思いを馳せた瞬間、彼の乗っていた雲が下降し始めてしまう。下界では、男も女も年寄りも皆、懸命に働いていた。そして、人間の平和な風景を見た彼は、「ああ、人間とはなんと愛すべき存在なのだろう」と感動した。

結局、その原因で久米仙人は神通力を失い、墜落して死んでしまった。たまたま川辺で洗濯する女たちは、それをみて、自分達の女の魅力が、彼が墜落した原因であると思つたという。

伝承上の「久米仙人」と武者小路実篤の「久米仙人」を比較してみれば、最も違つた部分が結末にあることがわかる。伝承上の「久米仙人」は前述のように、墜落した後には久米仙人は死ぬことがなかっただけでなく、再び活躍するようになった。しかし、武者小路実篤の「久米仙人」では、彼は墜落して直ちに死んでしまふのである。武者小路実篤に書かれた久米仙人は仙人とはいひながら、仙人になつたからこそ逆に人間や人間界を愛するようになり、非常に人間らしい仙人として死んでいく。特に、注意しておきたいのは、武者小路が描いた久米仙人は、地上で修業した時に、人間の醜い部分しか目に入らず、人間を虫けらのようなものにしていった。しかし、仙人になつて天上界から人間界を観察する機会があつて、そこで人間の美と可愛さを初めて感じたという点である。即ち仙人の視点から凡人世界を見ることによって、生き物の存在価値と愛すべきところを、初めて知るようになり、仙人の視点を経てこそ、初めて人間性を感じることが出来たのである。

武者小路実篤は、「久米仙人」が収載される『燃ゆる林』の「序」において、自分の創作方法と目的を次のように述べている。

小説をかく時は、ある感じをかきたい時に、事実から得た実感を勝手に誇張し、或は縮小し、あることをなしとし、ないことをあることとし、又全く想像の世界に入り、しかし自ら事実の如く感じつつかくこともある。

自分にとつてはどつちでもいいのである。ただごまかさず

に、人情の本当の姿、人間の心の姿を本当にかき願わしたい。

このような創作方針と武者小路実篤の人生の経歴を合わせてみれば、作品の中に頻繁に現出する人間の労働と農村風景は、彼の宮崎県で実施した「新しき村」運動の経験に基づいて描いた場面だとも言えるだろう。また、「人情の本当の姿、人間の心の姿をかき願わしたい」という目的から、武者小路実篤における「久米仙人」の新しい解釈こそ、彼自身の、現実の人間世界と人情の美に対する愛の表明となつていて考えられる。武者小路実篤の「人情の本当の姿」に注目した点においては、周作人の「日本の人情美」(注26)という文章に書かれた見方——「日本の国民性の美点は私から見れば人情に富んでいることである」と合致する。

また、冒頭で紹介したように、周作人の前に、韞玉訳の「久米仙人」(一九二二年)が掲載された。彼も「久米仙人」についての評価を述べている。彼の感想から、周作人以外の中国の翻訳者は、どのように「久米仙人」を認識し、またどんな視点からこの作品を取り扱ったのが窺える。ここに、韞玉の訳者付記の関連部分を引用する。

韞玉訳「久米仙人」の「作家伝略」

現在所譯の這篇東西、雖然是寓言、人道的氣味也是很濃厚的。(拙訳 今回訳出したこのものは、寓言とはいえず、人道的の匂いも濃厚だ。)

以上の引用箇所から見れば、韞玉も「久米仙人」に現れる「人道的の匂い」の要素に注目している。それは、周作人が「人間性」と「人情」という人道主義の着目点から、この作品を重視したことを、間接的に証左している。

三 方針としての〈重訳〉——「久米仙人」を訳し直す動機

「久米仙人」翻訳の初刊にあたって、周作人は訳文の最後に付けた、「この小説は、日本の雑誌に掲載された当時、かつてある人に訳され、『東方雜誌』に載せられた」という説明から見れば、周作人は「久米仙人」が日本の雑誌『太陽』で掲載されたことと、既に中国で紹介されたことを知っていた。周作人に言及された既存の前訳は、一九二一年七月十日の『東方雜誌』第十八卷第十三号に掲載されていた韞玉訳の「久米仙人」を示している。また、この翻訳は、東方雜誌社が編集、上海商務印書館により「東方雜誌二十周年記念刊行物」として一九二四年四月に刊行した『近代日本小説集』(東方文庫第79種)にも収録された。初版後の一九二四年十月と一九二九年九月に、二回再版された。

『近代日本小説集』には、韞玉訳の「久米仙人」のほかに、国木田独步著夏丐尊訳の「夫婦」、鈴木三重吉著周作人訳の「金魚」、石川啄木著周作人訳の「兩条的血痕」、有島武郎著周作人訳の「潮霧」、菊池寛著仲持(胡仲持)裴注 訳の「投票」が収録されている。この本の編集様式と日本作家の構成からみれば、周氏兄弟が共訳した『現代日本小説集』と非常に類似していることがわかる。例えば、本の最後に「付録 作家伝略」が付けられている、しかも、国木田独步、鈴木三重吉、有島武郎に関する説明は、主に周作人が編集した『現代日本小説集』の「付録」の内容と全く同じである。また、国木田独步の訳は夏丐尊によるものである。しかし、付録の作家伝略に関する説明は、周作人が『現代日本小説集』に書いたものから転載したのである。さらに、『近代日本小説集』

が採録した日本の作家は、石川啄木以外、全てが『現代日本小説集』と重なっている。しかも、石川啄木は、周作人に非常に重視されている作家である。例えば、石川啄木「兩条血痕」の訳文と作家に関する説明は、『近代日本小説集』の後に、周作人の訳作集『兩条血痕及其他』（上海開明書店、一九二七年）に再び収められた。興味深いことは、『近代日本小説集』と『現代日本小説集』はいずれも商務印書館によって出版されている。『現代日本小説集』の場合、編集を主に担当したのが周作人である。『近代日本小説集』の場合、六篇の翻訳のうち、魯迅によるものが一篇もないことと対照的に、周作人によるものは三篇があり、全書の半分を占めている。また、『近代日本小説集』は、周作人が魯迅と決別した半年後に出した翻訳書であることから、周作人の手によって編集された可能性が高いと考えられる。

周作人は、「久米仙人」の前訳の初出まで説明していることから、彼が『近代日本小説集』を編集する際に、それを目にしたことは容易に推測される。では、なぜ前訳が再三にわたり刊行されたにもかかわらず、あえて「久米仙人」を選び訳したのだろうか。

魯迅の翻訳思想を考える場合は、「直訳」の理念以外、「重訳」と「複訳」といった翻訳の概念も非常に重要である。「重訳」に関して、彼は主に「論重訳」（『申報・自由談』、一九三四年六月二十七日）、「再論重訳」（『申報・自由談』、一九三四年七月七日）という文章において論述している。また、「複訳」という概念について、彼は「非有複訳不可」（『文学』第四卷第四号、一九三五年四月）にまとめている。魯迅の論点によれば、「重訳」というのは、原作が元々使われている言語から直接翻訳するのではなく、一度ほか

の外国語に翻訳されたものを通して翻訳することである。「複訳」というのは、同じ作品に関して、いくつかの違う版本の訳が存在する上で、またその作品を訳出することである。つまり、魯迅は、違う言語からの「重訳」と同じ翻訳対象に対する多版本の「複訳」をはっきり区別している。例えば、周作人の「久米仙人」の翻訳を例にしてみれば、彼と韞玉二人が、同じ作家の同じ作品「久米仙人」を各自に訳出した現象は、魯迅のいう「複訳」という類型に当たる。ここで、魯迅の「複訳」に関する主張を引用する。

複譯還不止是擊退亂譯而已，即使已有好譯本，複譯也還是必要的。曾有文言譯本的，現在當改譯白話，不必說了。即使先出的白話譯本已很可觀，但倘使後來的譯者自己覺得可以譯得更好，就不妨再來譯一遍，無須客氣，更不必管那些無聊的嘮叨。取旧譯的長處，再加上自己的新心得，這才會成功一種近於完全的定本。（注27）

（訳（注28）） 複訳は胡散な翻訳の撃退にとどまらない。いくらかいい翻訳書が出ていても、複訳はやはり必要である。かつての文語訳の訳書は、いま口語訳に改めるべきことは、言うまでもない。先行の口語訳の翻訳書がかなりの出来栄であつたにせよ、後続の訳者自身が、もつとうまく訳せると思つたなら、もう一度訳して差し支えない。遠慮する必要はないし、なおさら、かのつまらぬ小言にこだわらなくてよい。旧訳の長所を取って、さらに自分が新たに会得したことを加えてこそ、完全に近い一種の定本が完成できる。

魯迅は、乱訳の撃退のため、翻訳の改善のため、そして中国新文芸の発展のため、「複訳」を強く主張している。一方、この問題に

対する周作人の態度は、魯迅との分岐点はなかった。ただ、概念の定義付けは、魯迅と異なっている。周作人の言説を挙げる。

普通所謂重訳、是說甲国話先訳為乙国的、再從乙国訳成国話、這是傳統的説法。現在用的是另一意義、乃是說同一種外国書的第二次的翻譯。(拙訳 普通にいわゆる重訳とは、甲の国の言葉を先に乙の国の言葉に訳して、また乙の国の言葉から我が国の言葉に訳すことを言う。これは伝統的な言い方である。ここで別の意義、即ち同じ外国書の二回目以上の翻訳という意味で用いる。(注29)

また周作人は、魯迅が定義した「重訳」というような現象を、「間接訳」という概念を用いて提示している。例えば、周作人は「翻訳四題」という文章の第一節「直接訳と間接訳」において、「直接原作者の原文から翻訳すること」を「直接訳」と言い、「他国版の訳文を参照して翻訳すること」を「間接訳」と称している。周氏兄弟それぞれが提示した概念の内包と現在流通している概念を比較すると、次のようになる。

表二 関連概念の比較

現象	概念		
一度ほかの外国語に翻訳されたものを通して翻訳すること	重訳	魯迅	現在通用
	間接訳	周作人	改訳或新訳
同じ作品に対して、複数の版本の訳が存在すること	複訳	重訳	重訳

魯迅が「非有複訳不可」を発表したのは、一九三五年である。しかし、周作人の「重訳」の提唱は、早くも一九二〇年の時の文章「翻訳と批評」に見られる。また、二〇年代だけでなく、翻訳の生涯にわたって一貫している。むしろ五〇年代に至って、彼が自分の翻訳思想を整理する時に、一連の文章を発表し、この問題を集中的に論じた。例えば、「重訳書」(一九五〇年)、「翻訳四題」(一九五一年)、「重訳書と重出書」(一九五一年)などがある。ここに、「久米仙人」を翻訳する前の段階での、周作人の「重訳」に関する考えを引用して検討する。

其実文句的誤解与忽略、是翻譯上常有的事、(中略)所以我想批評只要以文句上的糾正為限、雖然應該嚴密、但也不可過於吹求、至於譯者(即被批評者)的名字、儘可不說、因為這原來不是人的問題、沒有標明的必要。(中略)如果對於某種譯文甚不滿意、自己去重譯一過、這種辦法我也是很贊成。不過、這是要有意的糾正的翻譯、才可以代批評的作用。(注30)

(拙訳 実は、語句の誤解と疎略は、翻訳においてよくあることである。(中略)従って、批評する際にはただ語句の訂正を限度とする。厳密にすべきとは言え、あまりあら探しをしてもいけない。訳者(即ち批判する対象)の名前については、言わない方がよい。なぜならば、これは本来人の問題ではないため、明示する必要はないのだ。(中略)もしある前訳に対して非常に不満であれば、自らもう一度訳し直す。このような方法には私もとても賛成する。ただし、これは修正の意識をもって重訳すること、はじめて批判に代る作用を及ぼせるのだ。

周作人は批判する対象の名前をわざわざ示すという行為は、あまりよくないと考えている。故に、『晨报副刊』で発表した「訳者付記」には、周作人は前訳の出典を書いたが、訳者の名前を配慮して書かなかった。翻訳批評という問題について、彼は訳者を批判するより訳文の指摘の方がより重要だと主張し、また、批判するより、自ら訳し直したほうが有意義だと提唱している。紙幅の関係で、周作人が訳し直す上での具体的な方法を詳しくは考察できないが、ここに、幾つかのパターンをあげておこう。(原作、韞玉訳、周作人訳の順で比較する。)

(一) 順番を変えた翻訳を原文通りに訳す

【原】彼は仙人にならないではやまない要求をもち、その要求を満たすだけの勇猛心をもっている。

【韞】他很有点勇猛的气象，不達希望是不止的。

【周】他總懷着不成仙不止的要求，以及足以完成這要求的勇猛心。

【分析】韞玉の訳の順番は、原作と全く反対になっている。

(二) 勝手に加筆した部分を削除

【原】人間になつて愉快にくらせばよかりさうなものである。

【韞】做个凡人，愉快的過日子，岂不是也很好麼。究竟為着什麼

要辛辛苦苦去做个仙人？

【周】在世上快快乐乐的過日子，有什麼不好呢？

【分析】「究竟為着什麼要辛辛苦苦去做个仙人？」は、原作にない部分であるため、削除された。

(三) 単語の誤訳を訂正

【原】百年の修業も、一寸油断をすればそれで無駄になる。

【韞】百年的修養，因為「一時的差錯，就化為烏有，也是常有的事。

【周】百年的修煉，只要有一點兒的疏忽，便前功尽弃了。

【分析】「修業」とは、仙術を求めるために修めみがくことである。しかし、中国語の「修養」は、体力を養うことを指す。従つて、訳語としては「修養」より「修煉」が適切である。「一寸」は短い時間という意味で、「一時」ではなく、「一會兒的」が正しい。

(四)、漏らされた部分を補充

【原】彼もまだ人間味を失なひ切らなかつたのだらう。

【韞】他還沒有把人世上的事完全丟開。

【周】他大約也還是沒有完全的失却了人性罷。

【分析】原文の「だらう」は、推量の意味を表している、しかし韞玉訳はそれを無視している。一方、周作人はそれを「大約く罷」という推量の文型を用いて厳密に訳している。

(五)、意識し過ぎた部分を直す

【原】彼が人生の空なものであることを心細く思ったことは疑へない。

【韞】但他的確看破了人生万事皆空是一定無疑的了。

【周】他对于人生的空虚覺得寒心，那是無疑的了。

【分析】韞玉は「心細く思った」を「看破」に訳している。その中国語の言葉は、「世の榮枯盛衰を空しきものと悟る」という意味を表す。ここでは、訳し過ぎて、適切ではない。周作人が訳した「覺得寒心」は、文章の雰囲気をよく伝えている。

おわりに

以上見てきたように、「久米仙人」の内容と形式上の特徴は、周作人の「趣味」という美学理念を中核とする選択基準に合致する。また、「久米仙人」の中には、武者小路実篤の人道主義の思想が伏流している。それは、一九二〇年代当時周作人が提唱していた「人的文学」の思想と趣味にも深く関連している。従って、「久米仙人」の内容と形式に現れる「趣味性」と、「久米仙人」に反映されている武者小路実篤の「人道」の思想は、周作人のこの作品に対する着目点と言える。また、周作人は韞玉が意訳した「久米仙人」を意識しながら、批判の代りとして、「重訳」という手段で、武者小路実篤の作品の精神により近い翻訳を出すことにした。それこそが、周作人が『現代小説日本集』を編集する際に、武者小路実篤の数え切れない作品群の中から、有名ではない「久米仙人」を選び訳した直接の動機であった。

注

(注1) 周作人が翻訳を始めた時期は創作活動より遥かに早い。

最初のもは、英訳の『アラビアンナイト』をもとに「アリババと四十人の盗賊」(一九〇四年)を訳し、『俠女奴』と改題した翻訳である。

(注2) 『如夢記・石川啄木詩歌集』、『現代日本小説集・両条血痕』(二〇〇五)、『欧里庇得斯悲劇集(上、中、下)』、『路吉阿諾斯對話集(上、下)』(二〇〇三)、『全訳伊索寓言集』(二

〇〇二)『浮世理髮館』『浮世澡堂』『狂言選』(二〇〇二)、『財神・希臘拟曲』『枕草子』(一九九九年)。

(注3) 数多くの論文が発表されて枚挙にいとまがないが、代表的な専門研究著作として、劉全福の『翻訳家周作人論』(上海外語教育出版社、二〇〇七年)、于耀明の『周作人と日本近代文学』(翰林出版社、二〇〇一年)、福建教育出版社、二〇〇九年)、于小植、『周作人的文学翻訳研究』(吉林大学博士論文、二〇〇七年)などがある。

(注4) 例えば、杉森正弥「武者小路実篤と魯迅・周作人の交流」(『語学文学』七号、一九九六)、于耀明「武者小路実篤との邂逅」(『周作人と日本近代文学』翰林書房、二〇〇一)。

(注5) 秦弓『二十世紀中国翻訳文学史』(百花文芸出版社二〇〇九)、王向遠『日本文学漢訳史』(寧夏人民出版社二〇〇七)。

(注6) 彼は『東方雜誌』に「一夜 俄国迦尔洵著」(一九二二年十九卷二〇号)という翻訳も発表している。

(注7) この説明文の中に周作人は『燃ゆる林』の出版年を間違っ
て一九二一年として紹介している。しかし、後の『現代日本小説集』の付録ではこの誤りを正している。

(注8) 周作人『人的生活』訳本序(一九二二年)参照。

(注9) 『一日裏の一休和尚』訳記、『久米仙人』訳者付記、『第二的母親』訳記、『某夫婦』訳記、『嬰兒屠殺中的一件小事』訳記、『周作人日記』参照。

(注10) 于耀明『周作人と日本近代文学』参照。

(注11) 『徒然草』日本古典文学大系三〇、岩波書店 一九五七年。

(注12) 日記原文「二月二十二日、晴、上午往北大、午在市場飯、買古本徒然草一冊七角」。

(注13) 鳥谷まゆみ氏は「周作人における『趣味』の内実」(『比較社会文化研究』第二十一号、二〇〇七年)において、周作人の「趣味」という概念について、生活の実践の側面、文章の表現の側面、「小品文」の選択の側面から論じている。本稿では、翻訳対象の選択の側面から考察する。

(注14) 「笠翁与随園」、「大公報」(一九三五年九月六日)に初出、本文は『周作人散文全集』(第六卷)参照。

(注15) 松枝茂夫訳の「笠翁与随園」から引用。松枝茂夫訳『周作人文芸隨筆抄』(富山房、一九四〇年)。

(注16) 「附録 芥川龍之介」(『現代日本小説集』)より引用。原文は「古代的故事経他改作之後、都住進新的生命去、便与現代人生出干系来了」。

(注17) 小川利康「中国語訳・有島武郎『四つの事』をめぐって——『現代日本小説集』所載訳文を中心に」(『大東文化太学紀要』三〇号、一九九二年)参照。

(注18) 翻訳は、『魯迅全集 第十二卷(古籍序跋集・訳文序跋集)』(一九八五年、学習研究社)の小谷一郎氏の翻訳によった。

(注19) 秋吉收「魯迅『野草』における芥川龍之介」(『日本中国学会報』、五十二号、二〇〇〇年)参照。

(注20) 「談訳訳」、「大報」(一九五〇年三月二十五日)に初出。本文は『周作人散文全集』(第十卷)参照。

(注21) 「日本近代三十年小説之発達」(『新青年』第五卷第一号、

一九一八)、「讀武者小路君所作一個青年的夢」(『新青年』第四卷第五号一九一八)、「日本的新村」(『新青年』第六卷第三号一九一九)、「日本新村訪問記」(『新潮』第二卷第一号一九一九)、「新村的精神」(『新青年』第七卷第二号一九二〇)、「與支那未知友人書」の付記(『新青年』第七卷第三号一九二〇)、「新村的理想和實際」(『晨報』副刊一九二〇年六月二十三、四日)、「武者先生和我」(『天地』第三期一九四三年)。

(注22) 松枝茂夫訳「人的文学」より引用。現代支那文学全集『文芸論集』(東成社、一九四〇年)参照。

(注23) 『周作人日記』(影印本)(大象出版社、一九九六年)参照。

(注24) 同注20

(注25) 『今昔物語集』(三)、日本古典文学大系(二十四)(岩波書店、一九六一年)参照。

(注26) 「日本的人情美」、「語絲」十一号(一九二五年一月)に初出。本文は『周作人散文全集』(第四卷)参照。

(注27) 「非有複訳不可」、上海『文学』月刊第四卷第四号(一九三五年四月)に初出、『且介亭雜文二集』に収録。

(注28) 今村与志雄責任編集・翻訳『且介亭雜文・且介亭雜文二集・且介亭雜文末編』(『魯迅全集』第四卷、学習研究社、一九八四年)の訳文より引用。

(注29) 「重訳書」、「亦報」(一九五〇年四月二日)に初出。本文は『周作人散文全集』(第十卷)参照。

(注30) 「翻訳与批評」、「晨報」(一九二〇年十一月二十三日)に初出。本文は、『周作人散文全集』(第二卷)参照。